

日本短角種では放牧中の増体が肉質を良くする

研究のねらい

夏に放牧地で生まれた日本短角種去勢牛を翌年再び放牧したのち肥育したときに、ほぼ3割の牛が肉の締まりが悪いために、枝肉の肉質が低く格付けされる。放牧中の増体量が肉質に大きな影響を及ぼしていると考えられるので、そのような面から低い格付けの原因を検討する。

研究の成果

放牧中の1日当たりの増体量とその後の肥育期間中の1日当たりの増体量を比較したところ、放牧中の増体量が高い群と、放牧中の増体量が低い群に分かれ、放牧中の増体量の高い群には格付けの低いものはなかった(図1)。

放牧中の増体量を調べたところ、放牧開始後60日前後までは肉質の良い牛と悪い牛の増体量には差がなかったが、それ以降、放牧期間を通しての1日当たりの増体量が0.6kg以上のものには、ほとんど肉質の悪いものは見られなかった(図2)。

枝肉を調べたところ、肉質の良い枝肉のロース芯面積は悪いものよりも有意に大きかった。これらのことから、放牧中、特に放牧開始後2カ月目以降の牛の増体が枝肉の肉質に大きな影響を及ぼすことが明らかとなった(図3)。

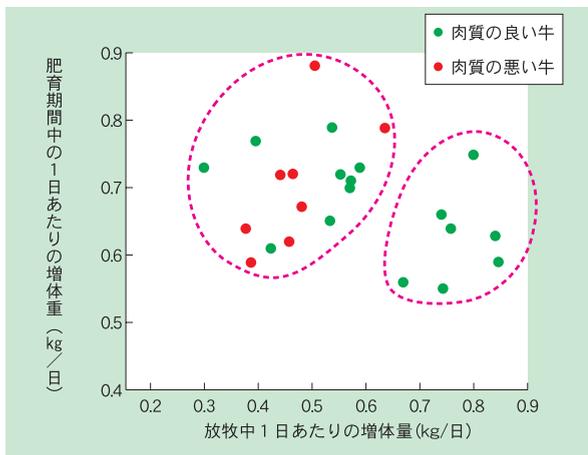


図1 放牧中と肥育期間中の増体量と肉質

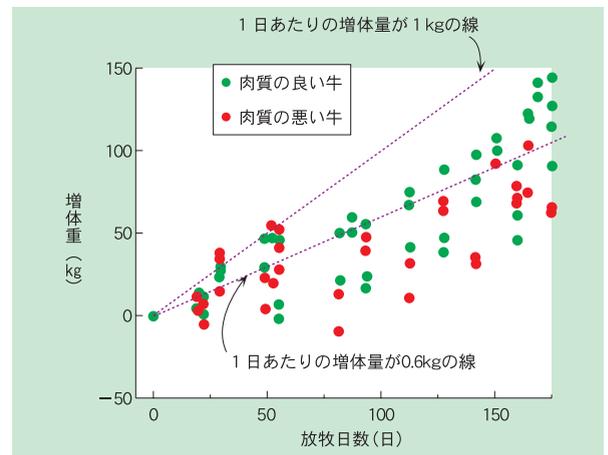


図2 放牧中の増体量と肉質

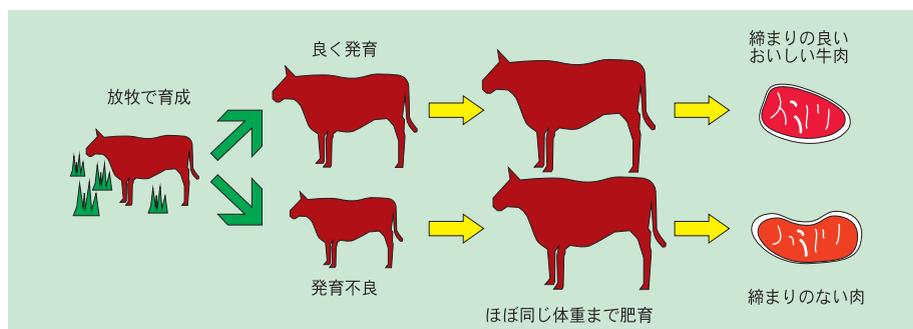


図3 日本短角種去勢牛の2シーズン放牧を取り入れた肥育では放牧中の増体が肉質に大きく影響する

成果の利活用

放牧開始後2ヶ月目以降の増体の管理を慎重に行うことが重要である。増体の見込みのない牛は早めに下牧させて舎飼いに移すなどの措置をとる。

春子の2シーズン目の放牧や去勢牛以外の育成牛では、結果が異なる可能性がある。

成果の発表年 平成13年度

(問合せ先: 総合研究部 総合研究第2チーム 019-643-3412)